條約締結權ト帝國議會トノ關係ヲ論ス

1297
1278

114
A2302

條約締結權ト帝國議會トノ關係ヲ論ス

我國ト歐米諸國トノ間ニ締結シタル現行條約ハ諸人ノ熟知スル如ク概ネ皆舊幕時代ニ締結シタルモノニシテ當時舊幕政府ハ海外ノ事情ヲ知ラス且ツ外交ノ事理ニ暗ク獨立國トシテ當然有セサル可カラサル國ノ主權ハ非常ニ制限セラレ殊ニ國民經濟上非常ノ損害ヲ蒙リ之レカ為ニ國運ノ發達ヲ害シタルコト其ノ幾千ナルヲ知ラス天下ノ公道ニ背キ國交上ノ慣例ニ戻リタル最モ不當ノ條約ト謂ハサル可カラ

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

ス左レハ條約改正ハ維新以来我國ノ輿論トナリ苟モ帝國臣民タルモノ一人トシテ之ヲ希望セサル者ナシ明治政府モ亦初ヨリ其ノ最大急務タルヲ認メ或ハ大使ヲ外國ニ派遣シ或ハ内地駐劄ノ外國使臣ヲ召集シテ鋭意條約改正ノ談判ニ從事シタルコト實ニ二十有餘年ナリトス其間彼諸外國ハ言ヲ左右ニ託シテ陰ニ我ノ要求ヲ拒ミ加フルニ我ヨリ提出シタル改正案モ亦毎ニ完全ナラス為ニ内外ノ攻擊ヲ受ケ改正事業ニ蹉跌ヲ來シタルコト前後其ノ幾回ナルヲ知ラス憂國ノ士常ニ悲憤慷慨スル所ナリ然レトモ改正事業ハ一回ハ一回ヨリ其ノ歩ヲ進メ幷上伯敷シテ大隈伯之ニ代リ青木子之ヲ受ケテ一大改良ヲ加ヘ終ニ陸奥子ニ至テ其ノ機漸ク熟シ今回日英間ノ對等條約ヲ見ルニ至リタルハ予輩臣民ノ國家ノ為ニ慶賀措カサル所ナリ然ルニ世間往々之ヲ議スル者ハ曰ク我カ國民ノ經濟ハ今日猶ホ幼稚ニシテ彼レ歐米人ノ強大ナル經濟ト相比ス可キニ非ス歐米人ニシテ一タヒ内地ニ入リ我カ國民ト同一ノ私權ヲ

有スルニ至ランカ彼ノ強大ナル資本ヲ以テ我ノ低廉ナル勞力ヲ使用シ生産ノ純益ハ擧テ彼ノ吸收スル所トナリ商工ノ實權ハ殆ト外人ノ占ムル所トナルニ至ル可シ故ニ我カ國ハ須ク外人ニ限リ特ニ其ノ私權ヲ制限シ得ル ノ權利ヲ條約中ニ保有スルヲ要ス可シ今回ノ條約ニ於テ外人ニ許スニ内國臣民ト均等ノ私權ヲ以テシタルハ是レ外ニ厚フシテ内ニ薄フスルモノナリト若シ此ノ說ニシテ果シテ實際ニ行ヒ得可クンハ固ヨリ我カ國ノ利益ニ相違ナシト

雖モ私權即チ民法上ノ權利ヲ保護スルニ内外人ヲ以テ區別ヲ為サストハ是レ國際公法上ノ定說ニシテ亦對等條約ノ通義タリ彼既ニ我ニ對シテ區別ヲ為サス我獨リ彼ニ對シテ區別ヲ為サントスルハ三尺ノ童子ト雖モ猶ホ且ツ其ノ對等ニ非サルヲ知ル多年我カ官民ノ條約改正ヲ一大急務ト為シタル所以ノモノハ他ナシ舊條約ノ獨リ彼ニ利ニシテ我ニ不利ナル非對等ノ條約ナルヲ以テナリ今ヤ我カ官民多年ノ希望遂ニ空シカラス日英ノ條約ニ於テ始メテ

其ノ目的ヲ達スルヲ得タリ勿論新條約中一二
讓歩シタル所ナキニ非ス即チ數箇ノ開港場開
ニ積荷ノ運搬ヲ許シタルカ如キ著シキ讓歩ナ
リト雖モ土地所有權ヲ初メ其ノ他國法上外人
ニ與ヘサル私權ハ猶ホ我カ權内ニ保有スルニ
非スヤ然ラハ則チ予輩ハ對等條約トシテ一點
ノ瑕瑾ヲ見ス之ヲ泰西諸國ノ條約ニ比スルニ
敢テ讓ル所アラサルナリ論者ノ説ノ如キハ彼
レ外國ニ向テ其ノ不當ヲ鳴シ對等條約ヲ疾呼
シツヽ却テ自ラ不當ヲ彼ニ加ヘントスル者

ナリ又此ノ如キ不當不理ナル條件ヲ條約ニ加
フルノ實際為シ得可カラサルコトタルハ少シ
ク内外ノ事情ニ通スル者ノ決シテ疑ハサル所
ナリ若シ人アリ論者ヲ目シテ言ヲ條約改正ニ
託シ其ノ實條約改正ヲ妨害スル者ナリト評ス
ルモ恐ラク辯解ノ辭ナカル可キナリ又或ル論
者ハ曰ク北海道沖縄及其ノ他島嶼中外人ノ雜
居ヲ許サハ人口ノ稀疎ナル經濟ノ發達セサル
遂ニ外人等ノ殖民地トナリ我カ國土ニシテ其
ノ實我カ國土ニ非サルノ狀況ニ至ランコトヲ恐

ル故ニ此等ノ島嶼ニ外人ノ雑居ヲ許シタルハ
新條約ノ一大欠點ナリト然レトモ予輩ハ論者
ノ意ノ果シテ何ノ所ニ在ルヲ知ル能ハサルナ
リ新條約ハ外人ニ土地ノ所有権ヲ與ヘス土地
所有ノ権利ナクシテ衆多ノ外人其ノ地ニ殖民
シテ農業又ハ鑛業ニ従事セントスルハ是レ何
人モ信スル能ハサル所ナルヘシ然ラハ論者ノ
恐ル、所ハ工業又ハ漁業ニ在ランカ優大ノ資
本ト経験トヲ有スル外人ノ競争ヲ恐ルトセハ何
ソ必ス島嶼ニ限ラン内地何ノ所カ此ノ競争ノ

害ヲ被ラサランヤ然レトモ外人ニシテ大ニ漁
業ヲ營マントスルトセハ我カ労力ノ低廉ナル沿岸
人民ノ漁業ニ熟練ナル何ソ故サラニ多費ナル
肉食労役者ヲ輸入スルヲ要センヤ又彼レ外人
ニシテ製造場ヲ設ケ若クハ漁業會社ヲ設立セ
ントセハ何ソ故サラニ之ヲ不便ナル各島嶼ノ
間ニ置クヲ要センヤ海陸運輸ノ便既ニ漸ク發
達シタル我カ國ニ在テ之ヲ内地都會ノ地ニ設
クルノ便且ツ利ナルニ如カサルナリ然ラハ則
チ論者ノ恐ル、所ハ或ハ外人ノ侵略ニ在ルカ若

シ外人ニシテ我カ地ヲ侵略セントスルトキハ何ソ
此ノ如キ迂遠ナル手段ヲ要センヤ是レ到底祀
人天ノ墜ツルヲ憂フルト一般ノ論ナルノミ
以上ハ條約ニ關シテ世間往々謬論ヲ傳フル者
ノ為メニ之ヲ一言スルノミ予輩本論ノ主旨ハ
國際條約中關係ニ關スル事項ハ我カ國法上帝
國議會ノ議ニ付スヘキモノナルヤ否ヤ論究セ
ントスルニ在リ此ノ問題ニ付テハ從來法學家
及政治家ノ說少カラス且ツ衆議院ノ如キハ前
期ノ議會ニ於テ此ノ問題ニ付キ豫メ議決スル

所アリ其ノ本年六月一日ノ決議ニ曰ク
條約ノ締結ハ天皇ノ大權ニ屬スト雖トモコ
レカ為メ新タニ法律ノ設定ヲ要シ又ハ法律
ニ變更ヲ生スヘキ事項及租稅ノ賦課變更ニ
關スル事項ハ憲法第五條第三十七條第六十
二條及第六十三條ノ成文ニ由テ當然帝國議
會ノ協賛ヲ經スヘキモノトス茲ニ之ヲ決議ス
抑々我カ國法ニ於テ此ノ問題ヲ生スル所以ノモ
ノハ憲法第十三條ニ「天皇ハ戰ヲ宣シ和ヲ講シ
及諸般ノ條約ヲ締結ス」トアリテ歐洲諸國ノ憲

法ノ一般ニ規定セルカ如ク關稅ニ關スル事項及通商條約等一定ノ事項ニ付テハ帝國議會ノ承認ヲ經ヘシトノ但書アラサルト第六十二條第一項ニ「新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ」トアリテ第十三條ヲ見レハ條約ノ締結ハ絶對ニ天皇ノ大權ニ屬スルモノヽ如ク第六十二條ヲ見レハ一種ノ間接稅ナル關稅ヲ賦課シ及ヒ其ノ稅率ヲ變更スルニ方テハ法律ヲ以テセサル可カラサルカ故ニ第十三條ノ除外例ヲ定メタルモノニ非スヤト

ノ疑アルヲ以テナリ

去レハ本問題ヲ解說センニハ此ノ二條ノ文意ヲ解釋シ第六十二條第一項ハ果シテ第十三條ノ除外例ナルヤ否ヲ決定セサル可カラス

今先ツ第十三條ニ付テ之ヲ論セン同條ニハ「天皇ハ諸般ノ條約ヲ締結ス」トノミアリテ毫モ制限若クハ條件ヲ附セサルカ故ニ條約締結權ハ絶對ニ天皇ノ大權ニ屬スルコト文理的解釋上一點ノ疑義ヲ存セサルモノトス又之ヲ天皇大權ノ一部ヲ規定シタル第十條ノ條文ト對照ハ

ルトキハ此ノ解釋ノ益〻正當ナルヲ見ル可シ第十條ニ曰ク「天皇ハ行政各部ノ官制及文武官ノ俸給ヲ定メ及文武官ヲ任免スル但シ此ノ憲法又ハ他ノ法律ニ特例ヲ掲ケタルモノハ各〻其ノ條項ニ依ル」ト第十條ニハ特ニ此ノ但書ヲ附シ第十三條ニハ何等ノ但書ヲ附セサルヲ見ルトキハ立法有ノ精神第十三條ノ大權ヲ以テ全ク天皇ノ專斷ニ屬セシメタルヤ明白ナリ若シ然ラハ何ソ第十條ノ如ク但書ヲ附シ特ニ除外例ヲ設ケサルノ理アランヤ且ツ之ヲ泰西諸國ノ憲法ト對照スルニ佛ト云ヒ墺ト云ヒ白ト云ヒ獨逸ト云ヒ其ノ他各國概ネ皆除外例ヲ明記シ始メテ一定ノ條約ニ關シ若クハ條約中一定ノ事項ニ對シ議會ノ協賛ヲ經ルヲ要セシムルトシレハ何等ノ但書ヲ附セサル我カ憲法第十三條ハ此等諸國ノ憲法ヲ規定スルノ例ニ照スモ條約締結權ヲ以テ絶對ニ天皇ノ大權ニ屬セシメタルモノナルヤ明ナリ論者或ハ曰ク我カ帝國憲法ハ我カ固有ノ國体ヲ基礎トシテ制定シタルモノナリ何ソ外國憲法ノ規定

ニ関センヤト勿論我カ帝國憲法ハ我カ固有ノ
國体ヲ基礎トセリ然レトモ當時立法者ノ傍ラ
泰西諸國ノ憲法ヲ參酌シタルハ到底掩フ可カ
ラサルノ事實ナリ少クモ立法者ノ泰西諸國憲
法ノ規定特ニ條約締結權ニ関スル條項ニ於テ
皆除外例ヲ明記シアルエトヲ熟知セサリシナ
ル可シトハ恐ラクハ何人モ之ヲ信スル者ナカ
ル可シ立法者既ニ之ヲ熟知シ而シテ故サラニ
之ヲ我カ憲法ニ掲ケサル所以ノモノ豈ニ其ノ
故ナカランヤ予輩ハ將ニ曰ハントス我カ帝國

憲法ノ泰西諸國憲法ノ輝ニ倣ハス條約締結權
ヲ以テ絶對ニ天皇ノ大權ニ属シタルハ即チ我
カ固有ノ國体ニ基クニ外ナラサルナリト此ニ
由テ之ヲ觀レハ論理的解釈ニ於テモ亦文理的
解釈ト毫モ抵觸スルナキノミナラス両々相對
シテ恰モ符節ヲ合シタルカ如クナルヲ見ル請
フ此レヨリ更ニ第六十二條ニ付テ解釈セン
第六十二條第一項ニ曰ク「新ニ租税ヲ課シ及税
率ヲ変更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ」ト此
ノ條文中ニ所謂ル租税ナル文字ノ意義ニ付テ

関税ヲ包含スルヤ否ヲ疑フ者ナキニ非スト雖
モ関税ハ一種ノ間接税タルヲ以テ廣ク租税ト
云フトキハ関税ヲモ包含スルヤ論ヲ須タス今
此ノ前提ヲ以テ本條文ヲ文理的ニ解釈スレハ
凡ソ新ニ関税ヲ起シ又ハ関税率ヲ変更スルト
キハ法律ヲ以テセサル可カラストノ結論ヲ生
ス可シ因テ論者ハ更ニ之ヲ根據トシ説ヲ為シ
テ曰ク新ニ関税ヲ起シ又ハ関税率ヲ変更スル
ニハ法律ヲ以テセサル可カラス即チ議會ノ協
賛ヲ経サル可カラス故ニ関税ノ新設又ハ関税

率ノ変更ニ関スル條約ノ事項ハ豫メ議會ノ協
賛ヲ経ルヲ要スト即チ前期衆議院ノ議決ノ如
キ是ナリ然レトモ是レ其ノ一ヲ知テ未タ其ノ
二ヲ知ラサル者ト謂フ可シ何ソヤ單ニ本條文
ノミニ付テ文理的ニ解釈ヲ下ストキハ新ニ関
税ヲ起シ又ハ関税率ヲ変更スルトキハ法律ヲ
以テセサル可カラストノ結論ヲ生スルカ如シ
ト雖モ熟本條ノ規定ヲ設ケタル立法者ノ精神
ヲ案スルニ其ノ所謂ル法律ヲ以テ定ムヘシト
アルハ租税ノ新設及税率ノ変更ニ付キ行政權

勅令ヲ以テスルヲ防クニ外ナラスシテ即チ法律ト勅令ノ別ヲ明ニスルヲ目的トシタルモノナリ法律ト條約トノ関係ヲ規定スルヲ目的トシタルモノニ非サルナリ若シ假ニ一歩ヲ譲リテ論者ノ説ニ從ヒ凡ソ租税ノ新設及税率ノ変更ハ絶對的ニ法律ヲ以テ定ム可キモノトセンカ凡ソ関税ニ関スル條約ヲ締結スルニハ豫メ議會ノ協賛ヲ経テ一ノ法律ヲ設ケ置カサル可カラス而シテ若シ其ノ條約成立セサルトキハ法律ハ唯名ノミニシテ一片ノ空文タルニ終ル

可シ果シテ然ラハ自國ノ法律ニシテ他國ノ同意承諾ヲ經ルニ非サレハ其ノ効力ヲ生セスト謂ハサル可カラス豈ニ奇怪ノ至ナラスヤ又衆議院ノ議決及論者ノ意ヲ折衷シ両國全權委員ノ間ニ於テ協議決定シタルノ後批准ノ前ニ於テ政府ヨリ一ノ関税法案ヲ提出シ議會ノ協賛ヲ求ムルト為サンカ此ノ場合ニ於テ其ノ関税ニ関スル條項ハ既ニ両國主權者ノ全權委任ヲ受ケテ決議署名シタル決定ニ本クモノナルヲ以テ議會ハ事實上復タ之ニ修正ヲ加フル能ハ

又故ニ此ノ際議會ノ取ル可キ方針ハ之ヲ贊成
スルカ又ハ之ヲ否決スルノ外アル可カラス議
會果シテ之ヲ否決センカ條約ハ全部之ヲ廢棄
セサルヲ得サル可シ果シテ然ラハ條約批准ノ
實權ハ議會ニ移ルモノニシテ第十三條ニ本キ
天皇ノ保有セラルヽ條約締結ノ大權ハ此ニ至
テ空名無實ニ帰スルニ至ル可シ是レ豈ニ第十
三條ノ精神ナランヤ若シ又議會ハ之ヲ否決ス
ルノ權ナク唯承認スルニ止マルモノトセハ此
レ虚飾ノ儀式ニ過キサルモノニシテ議會ノ決

贊ヲ經ルノ要アル理ナシ且ツ憲法上協贊ノ權
アル議會ニシテ既ニ贊成ノ權アラハ何ソ復タ
之ヲ否決スルノ權能ナカランヤ故ニ條約中關
稅ニ關スル事項ハ必ス法律ヲ以テ定ム可シト
ノ説ハ此レ亦畢竟誤謬ノ解釋タルヤ明ナリ又
論者アリ曰ク關稅ニ關スル事項ハ本來法律ヲ
以テ定ム可キモノナレトモ其ノ法律ヲ以テス
ルハ畢竟議會ノ協贊ヲ經ルニ外ナラス故ニ本
問題ノ如キ場合ハ必ス之モ法律ヲ以テ之ヲ定
ムルヲ要セス唯議會ノ協贊ヲ經ルヲ以テ足レ

リトスト此ホ誤謬ノ解釋ト謂ハサルヲ得ス抑モ
法律ト帝國議會ノ協賛トハ全ク其ノ性質ヲ異
ニス帝國議會ノ協賛ハ條約ヲ變シテ法律タラ
シムル能ハス條約ヲシテ權令ト帝國議會ノ協
賛ヲ經セシムルモ之レカ為メ其ノ條約ハ法律
ト為ル能ハス依然トシテ第六十二條ノ明文ニ
抵觸スルヲ免レス且ツ法律ト協賛トノ別ハ憲
法條文ノ上ニ於テ甚タ明ナリ第六十二條第三
項ニハ「國債ヲ起シ及豫算ニ定メタルモノヲ除
ク外國庫ノ負擔ト為ルヘキ契約ヲ為スハ帝國
議會ノ協賛ヲ經ヘシ」トアリ第六十四條第一項
ニハ「國家ノ歳入歳出ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議
會ノ協賛ヲ經ヘシ」トアリテ立法者ハ常ニ法律
ヲ以テ定ム可キ場合ト算ニ議會ノ協賛ヲ經レ
ハ足ル場合トヲ區別セリ故ニ論者ノ説ノ如ク
ンハ第十三條ニ「但シ関税ニ関スル事項ハ帝國
議會ノ協賛ヲ經ヘシ」トノ明文ヲ設ケサル可カ
ラス此レ憲法上立法用語ノ上ヨリ見ルモ亦甚
タ明ナリ要スルニ第六十二條第一項ハ算ニ文
理的解釈ニ依リテ之ヲ観ルトキハ或ハ第十三

條ノ除外例ニ非サルヤノ疑ヲ生セサルニ非ス
ト雖モ憲法全体ヲ通覽シ精ク立法者ノ意思ヲ
尋繹スルトキハ(論理的解釋)其ノ第十三條ト毫
モ関係ナキヤ炳トシテ火ヲ見ルカ如シ
故ニ予輩ハ憲法第十三條ノ解釈上ヨリ観ルモ條
將タ第六十二條第一項ノ解釈上ヨリ観ルモ條
約ハ其ノ関税ニ関スルト否トヲ問ハス全ク議
會ノ協賛ヲ経ルヲ要セサルコトヲ信シテ疑ハ
サルナリ此ノ問題ハ従来議論紛々トシテ特ニ
衆議院ノ如キハ豫メ議決スル所アルヲ以テ日

英新條約締結ノ今日再ヒ議論ノ沸騰蜂起セサ
ルナキヲ保シ難シ聊カ所見ヲ陳シ識者ノ教ヲ
乞ハントス

區 寄 院

林 寄 院

帝國憲法第十三條ニ付各國憲法參照

枢密院

○帝國憲法第十三條ニ付各國憲法參照

○白耳義

第六十八條　王ハ陸海軍ヲ統率シ交戰ヲ宣告シ和好聯盟及貿易ノ條約ヲナス但シ國ノ利益安全ニ於テ之ヲ許ストキニハ直チニ相當ノ文書ヲ添ヘテ之ヲ兩院ニ通知スヘシ貿易條約及國又ハ各個人ニ負担ヲナサシムヘキ所ノ條約ハ兩院ノ承認ヲ得タル後ニ非サレハ其ノ効ヲ有セス

國土ノ讓與交換合併ハ法律ニ由ルニ非サ

レハ之ヲ行フコトヲ得ス
何レノ場合ニ於テモ秘密ノ條款ハ本約ノ
條款ヲ敗ルコトヲ得ス

○伊太利

第五條　王ハ交戰ヲ宣告シ和好聯盟貿易及
其ノ他ノ條約ヲ結フ而シテ國ノ利益安全
ノ之ヲ許ス限ハ其ノ文書ヲ添ヘテ之ヲ兩
院ニ通知シ云々
國庫ノ負擔又ハ版圖ノ變更ニ關スル條約
ハ議院ノ承諾ヲ得タル後ニ非サレハ其ノ
効力ヲ有セス

○荷蘭

第五十五條　王ハ外交事務ノ總裁權ヲ有ス
第五十六條　王ハ交戰ヲ宣告ス而シテ直チ
ニ之ヲ兩院ニ報知シ國ノ利益安全ヲ妨ケ
スト思惟スル文書ハ同時ニ之ヲ通照ス
第五十七條　王ハ外國ト和好及其ノ他ノ條
約ヲ結ヒ及批准ス國ノ利益安全ノ之ヲ許
スト思惟スルトキハ直チニ其ノ條約ヲ兩
院ニ通照ス（土地讓與交換及權利關係ノ條約ノ項ハ畧自國ニ同シ）

○普漏西

第四十八條　王ハ交戰ヲ宣シ和平シ決スタ
國政府ト諸條約ヲ鈐印ス

○墺太利

第五條　皇帝ハ陸軍ノ最上指揮ヲ行ヒ交戰
ヲ宣告シ和平ヲ決ス

第六條　皇帝ハ政畧ニ關スル條約ヲ締結ス
通商及政畧條約ニシテ國家又ハ締盟國ノ
一方若クハ一個人ニ義務ヲ負ハシムルモ
ノハ議會ノ承諾ヲ經ルニ非サレハ其ノ効

力ヲ有セス

○瑞典

第十一條　國王ハ王國ト外國トノ交際ニ關
スル事項ニ付テハ其ノ適當ト認ムル方法
ニ依テ之カ準備及取扱ヲ為サシムルコト
ヲ得外務大臣ハ外交事項ニ付キ他ノ參事
院議官立會ノ上之ニ關スル報告書ヲ國王
ニ上奏スルノ責任ヲ有ス外務大臣不在ノ
トキハ國王ヨリ特ニ指定セラレタル參事
院議官ニ其報告書ヲ移スヘシ國王ハ責任

アル右各官吏ノ意見ヲ聽納シ之ヲ議事録ニ記載シタル後其ノ面前ニ於テ裁決ス議事録ハ特命ノ官吏之ヲ保管ス國王ハ外交事項ニシテ之ヲ參事院ニ知ラシメ以テ其ノ議決ヲ必要ト認ムルモノニ付テハ之ヲ該院ノ議ニ付スルヿトヲ得

第十二條　國王ハ前條ニ依リ外務大臣及特ニ指定シタル參事院議官ノ意見ヲ聽納シタル後外國ト條約及同盟契約ヲ為スノ權ヲ有ス

第十三條　王若シ外國ト交戰ヲ宣告シ或ハ和平ヲ講セントスルトキハ臨時ニ參議院會議ヲ開キ大臣ニ其ノ理由ト事情ヲ示明シ百七條ニ定メタル責任ニ從ヒ議事録ニ記載スル為ニ各別ニ各大臣ノ意見ヲ諮ヒ然ル後ニ王ハ其ノ最モ國ニ利益アリト判スル所ノ決定ヲ取リ之ヲ施行スルノ權ヲ有ス

○瑞士

第八條　宣戰講和ノ權外國政府ト同盟其ノ

他ノ條約殊ニ關稅及貿易條約ヲ結フノ權ハ專ラ聯邦政府ニ屬ス

○佛蘭西

第八條　大統領ハ諸般ノ條約ヲ商議シ及批准ス國家ノ利益及安全ノ許ス限リハ速ニ之ヲ議會ニ通知スヘシ

講和條約、通商條約、國庫ノ負擔トナルヘキ條約其ノ他外國ニ於テ佛國人ノ身體及所有權ニ關スル條約ハ兩院ノ議決ヲ經タル後ニ非サレハ確定セス

版圖ノ讓與交換合併ハ法律ニ由ルニ非サレハ之ヲ行フコトヲ得ス

第九條　大統領交戰ヲ宣告スルハ豫メ兩院ノ承諾ヲ得ヘシ

○希臘

第三十二條　國王ハ國家ノ元首ニシテ陸海軍ヲ統御シ戰ヲ宣シ講和同盟及通商條約ヲ締結シ國家ノ利益及安全ノ許ス限リ速ニ說明ニ必要ナル書類ト共ニ之ヲ議會ニ通知スヘシ然レトモ通商條約其ノ他ノ本憲

法ノ條項ニ依リ法律ノ制定ヲ必要トシ又ハ
希臘人各自ノ負擔ヲ增スヘキ讓與ヲ含
有セル條約ハ議會ノ承諾ヲ經ルニ非サ
レハ其ノ効力ヲ有セス

○西班牙

第四十六條　國王左ノ件ヲ行フニハ特別ノ法
律ニ依ラサルコトヲ得ス
第三、攻敵盟約、貿易契約及ヒ外國ニ助金
ヲ給スル契約ヲ准定スル事

○葡萄牙

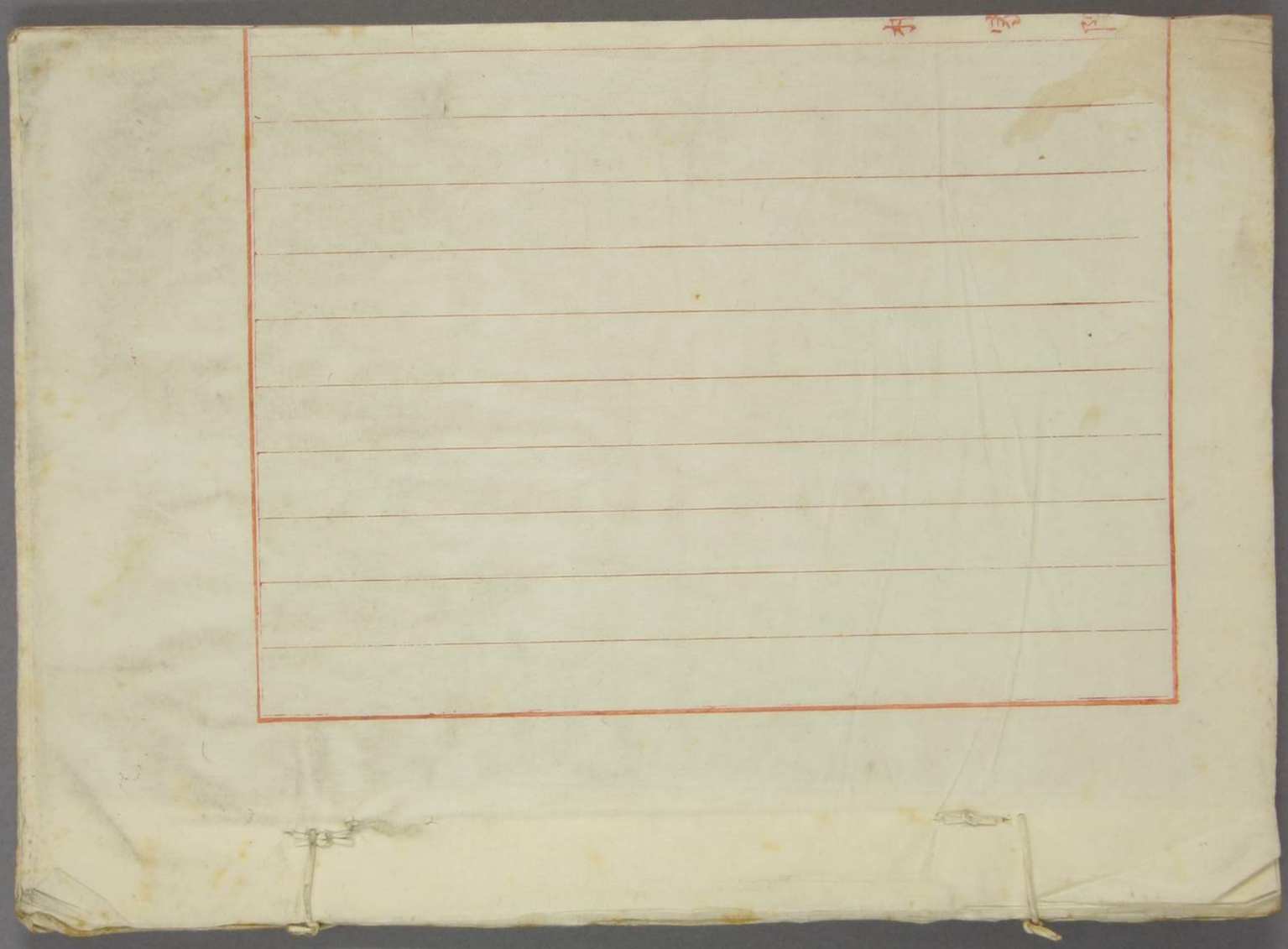
第七十五條　國王ハ行法權ノ首長ナリ而シテ
執政官之ヲ受用ス
行法權長ノ職掌ハ大約左ノ如シ
第八、攻敵條約、防敵條約、助金條約及ヒ
貿易條約ヲ制定スル事但シ國益國
安ノタメニ要スル所アルトキハ該條
約取結ヒノ後之ヲ國會通知ス平
和ノ時ニ於テ取結ヒタル條約ノ王
國ノ州地或ハ所屬地ノ讓與若ク
ハ其ノ境域ノ變易ニ關スルモノハ

國會ノ許諾ヲ得ルノ後ニ非サレハ執行ス可カラス

增補律例第十条ニ曰ク凡ソ政府ニ於テ外國ト取締フ可キ諸条約ハ之ヲ准定スルノ前ニ國會ヲ開ケル國會ノ許認ヲ受ク可シ

○丁抹

國王ハ戰ヲ宣ヘ和ヲ決シ及ヒ同盟貿易ノ條約ヲ結フ然レトモ両院ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ土地ノ一部分ヲ割キ及ヒ現行ノ「ドロワピエブリク」(國憲刑法治罪行政ヲ云)ノ條規ヲ更改スル約ヲ定ムルコトヲ得ス

枢密院

福家完